

第 19 回講演会

日時：平成 29 年 8 月 9 日（水）15：00～17：00

会場：熊本市現代美術館アートロフト

『学都・熊本の国際化を考える～イギリスで生まれ、熊本に住んで 20 年～』

熊本県立大学文学部英語英米文学科 教授 レイヴィン リチャード 氏

<講師プロフィール>

1962 年イギリス Torbay 生まれ。Leeds 大学文学部卒業、Sheffield 大学文学研究科修了。

1987～1990 年 JET プログラムにて天草で ALT。

これまでフランス語、ドイツ語、ラテン語、北京語、広東語、日本語を学ぶ。現在はスペイン語、タイ語を勉強中。

2002 年～熊本県立大学勤務。現在は文学部教授で、英語英米文学科の学科長を務める。

研究分野は応用言語学。質的研究法、内省的研究法を用いて、外国語の能力が日々の勉強や言語体験の中でどのように発展していくのか、スムーズに上達する場合とそうでない場合はどこが違うのかといったテーマで研究を行っている。

ただ今ご紹介頂きましたレイヴィンと申します。よろしくお祈りします。本日の講演会では、「イギリスの街、日本の街」「イギリスの教育制度、日本の教育制度」「言語教育について」「住みやすさについて」の 4 つのトピックでお話したいと思います。

1. 「イギリスの街、日本の街」

イギリスの街というと皆さんどこを思い浮かべるでしょうか？まずはロンドンでしょうか。



それから、イギリス人も日本人もとても好きなコッツウォルズ。



他には、劇作家シェイクスピアの出身地であるストラトフォード。



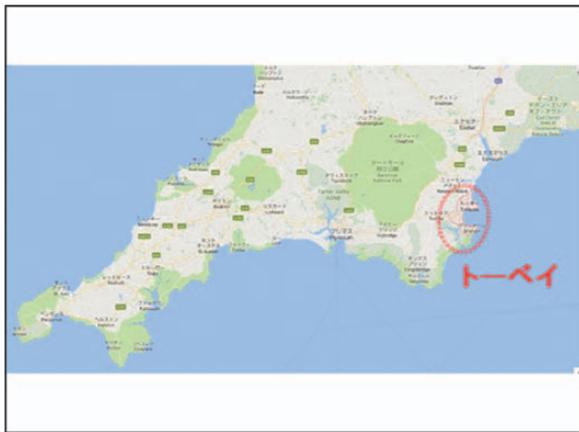
ピーターラビットの作者が住んでいた湖水地方もあります。



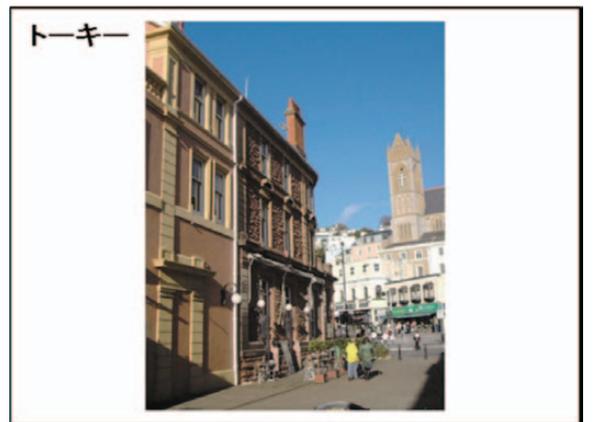
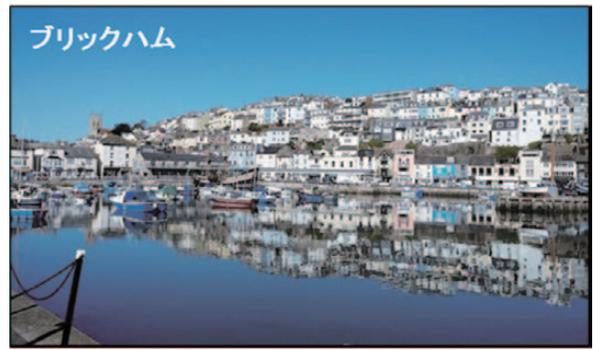
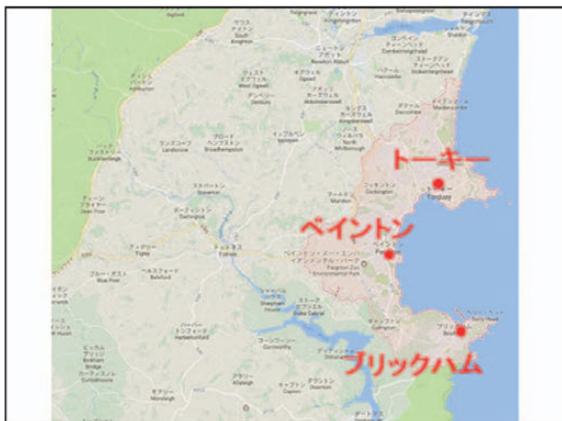
そのほか、会場の皆様からは、ポーツマス、エディンバラ、ウェールズ、リヴァプール、グラスゴー、ブラックプールといった声が挙がっています。全体的にロンドン周辺とその北側のエリアが多くなっています。この偏りの一つの要因は、日本で目にする

ことのできる各街の情報量の差とも言えるでしょう。

次に私の故郷を紹介します。私が生まれ育ったのはトーベイというイギリス南西半島の海辺の街です。



トーベイはブリックハム、ペイントン、トーキーの3つの町から成っています。各町の風景を紹介します。



私が実際暮らしていたのは、今紹介したような街の中ではなく、もう少し田舎のガンプトンという村です。ガンプトンの様子と私の生家をご紹介します。

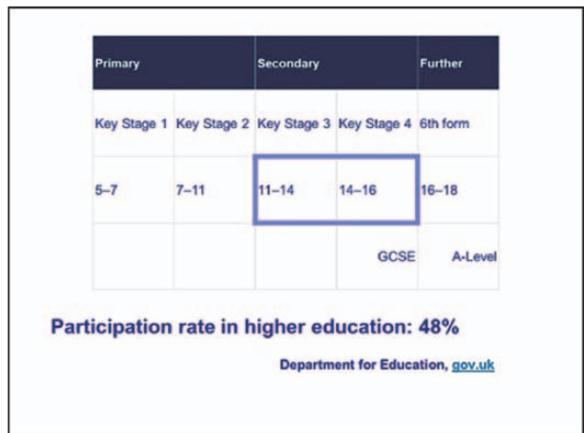




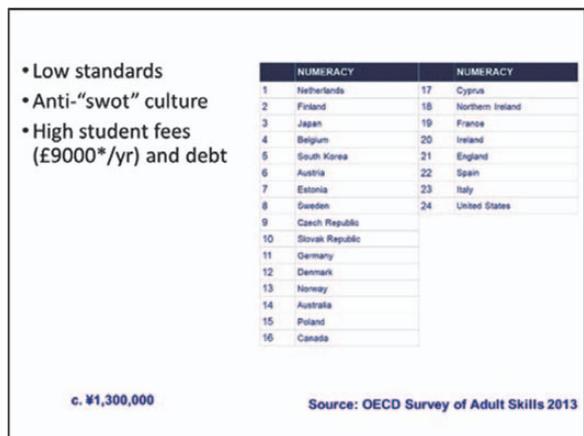
皆さんグリーンウェイ・ハウスをご存知ですか？作家アガサ・クリスティの別荘です。この別荘が私の家の隣にあり、父はアガサ・クリスティの家の庭師を務めていました。

2. 「イギリスの教育制度、日本の教育制度」

イギリスの学校教育は、Primary (一等)、Secondary (二等)、Further (継続)、Higher Education (高等教育) に分かれており、5 歳から 16 歳までの Primary および Secondary が義務教育になります。Primary と Secondary の 2 つの教育段階は、さらに 4 つのキーステージ (KeyStage1=5~7 歳、KeyStage2=7~11 歳、KeyStage3=11~14 歳、KeyStage4=14~16 歳) に分けられています。Primary と Secondary の教育をそれぞれの学校で受けることになり、Primary の学校は日本での小学校に近く、Secondary の学校は日本での中学校と高校が一緒になっているような学校です。



では、イギリスの教育の問題点について考えてみましょう。



1 つ目は、「Low standards (学力水準の低さ)」です。2013 年に OECD が発表した算数の国別学力ランキングを見ると、1 位オランダ、2 位フィンランド、3 位日本に大きく差をあげられ、イギリスは 21 位となっています。こうなってしまった理由は様々な説がありますが、その一つとして改革が多すぎて、カリキュラムや制度がすぐに変ってしまうからであると言われています。

2 つ目は、「Anti-“swot” culture」です。swot とは勉強熱心という意味で、イギリスでは勉強ばかりしすぎる事をよしとしない風潮があります。「勉強していないのに成績が良い」というのが格好良いと思われています。

3 つ目は、「High student fees and debt (学費が高い)」です。以前は 3,000 ポンドほどであった国立大学の年間の学費が、2011 年頃から 9,000 ポンド(日本円でおおよそ 130 万円)となっており、日本の国立大学と比べても 2 倍以上の高額といえます。

次に日本の教育の問題点について考えてみましょう。私が感じている事を3点挙げます。

	NUMERACY	NUMERACY	
1	Netherlands	17	Cyprus
2	Finland	18	Northern Ireland
3	Japan	19	France
4	Belgium	20	Ireland
5	South Korea	21	England
6	Austria	22	Spain
7	Estonia	23	Italy
8	Sweden	24	United States
9	Czech Republic		
10	Slovak Republic		
11	Germany		
12	Denmark		
13	Norway		
14	Australia		
15	Poland		
16	Canada		

Source: OECD Survey of Adult Skills 2013

- Lack of creativity
- Lack of initiative
- Too much schooling

1つ目は、「Lack of creativity (創造性の欠如)」です。この課題については、制度改革もあり、ゆとり教育と呼ばれる、つめこみ教育を減らし、創造性を養うという取組みがなされた時期もありましたが、創造性が育まれた実績はあまり実感できないのではないのでしょうか。

2つ目は、「Lack of initiative (主体性の欠如)」です。個人の主体性を発揮する場が少ないと感じる一方で、集団の主体性はあるように感じています。例えば体育大会での組み体操など、もちろん教師の指導もあると思いますが、生徒の主体性を発揮し、一つの形を作り上げているように感じます。

3つ目は「Too much schooling (多すぎる授業)」です。これは学校だけを指しているのではなく、学校の授業があり、さらにその上で多くの人は塾へも通っているという状況を指します。前述の主体性の欠如とも関連しますが、これだけ授業をつめこまれると、自分で「こうしよう」と決めてなにかに取り組むといった事をいつ行えるのかと疑問に感じます。その分知識量はイギリスの子供より多いのだと思います。

3. 「言語教育について」

ここではまずイギリスでの外国語教育の現況をみてみましょう。

•小学校では外国語が必修	French Spanish German
•教員のスキルが不十分	
•イマージョン教育が殆どない	Italian Russian Japanese
•Independent level に達する生徒が約9%*	Turkish Portuguese
	Arabic Mandarin Chinese

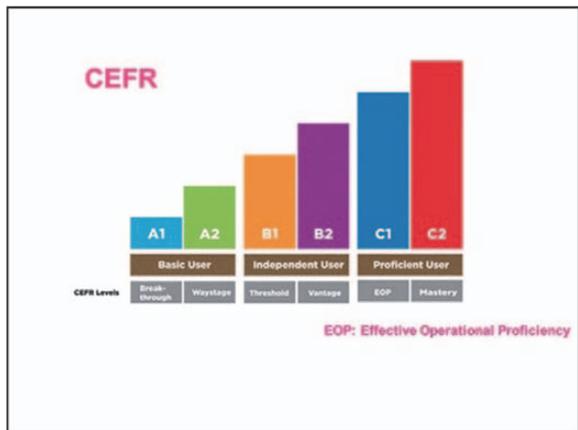
*Sweden では約82%

イギリスでは外国語が小学校でも必修になっていますが、教員のスキル不足という状況があります。例えば、高校時に勉強しただけのフランス語を、20年後、先生として生徒に教えずにはならないといった事も多々あるようです。

次に、ヨーロッパの中ではドイツや北欧の国で、英語を話す能力が高い人が多い傾向にあります。さらに英語だけでなく、第2外国語も含めて3ヶ国語を話せる方も多く、日本やイギリスとは大きく違います。また、カナダやスペインにおいては、イマージョン教育という、すべて（または半分）の授業を学びたい言語で行う（例えば化学をフランス語で学ぶ等）という方式を採用していますが、イギリスでそういった取り組みはほとんどありません。イギリスも日本と同様に島国であり、英語がどこでも通用するという考えがどこかにある為、外国語の習熟度が上がっていかないという状況があります。

最後に、外国語の能力が、イギリスでは義務教育を終えた時点で Independent level に達する生徒が約9%しかおらず、スウェーデンでは82%である事に比べて、圧倒的に低くなっています。この Independent level というのは、CEFR という外国語の能力を測る一つの指標のなかのレベルを指します。CEFR では、例えば「レストランで好きなものを注文できる」といった、“できること”でレベル分けをして、外国語の能力を測るものです。(Independent level とは、その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいいていの事態に対処す

ることができるレベル)



日本でも CEFR 日本版の CEFR-J を適用しようという動きがあるようです。



では、日本での外国語（英語）教育の課題を挙げてみましょう。

- Lack of communication in classes
 - Gradually changing
- Lack of reading
 - Textbooks are short
 - Not enough pleasure reading
- Lack of free composition

まず、授業の中で会話などのコミュニケーションを学ぶ機会の不足があります。これまで何度もカリキュラムの見直しがありましたが、なかなかコミュニケーションに時間を割くことはできないようです。特に進学校ではこの傾向が顕著です。

また、日本の英語教育を考えると、「読み書きはできるが、話せない」といった話をよく聞きますが、TOEIC のスコアを見るとリーディングのスコアがすごく低いという状況があります。これについて私は、日本人は圧倒的にリーディングが足りないと思っています。教科書への親しみやすさを重視してか、テキスト量が少ないのです。

TYPICAL NUMBERS OF WORDS IN TEXTBOOKS IN THREE COUNTRIES

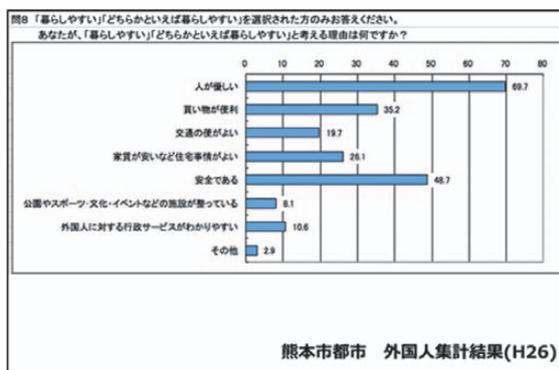
	JUNIOR HIGH	SENIOR HIGH	TOTAL
MEXICO	126,043	106,493	232,536
KOREA	23,483	37,950	61,433
JAPAN	14,066	20,977	35,043

Rob Waring, Notre Dame Seishin University (Okayama)

メキシコ、韓国、日本の中学・高校の英語の教科書に入っている語数を比較した表を見てみると、日本の 35,043 語に対して、韓国では 61,433 語、メキシコでは 232,536 語と圧倒的な差が生まれています。その他にももちろん、教科書以外の本を読まないといった問題もあるでしょう。

4. 「住みやすさについて」

熊本市が実施した、市内にすむ外国人を対象としたアンケート結果の、熊本市を暮らしやすいと感じている理由をみてみましょう。



1 位は「人が優しい」、これは私も実感しています。2 位は「安全である」です。熊本をはじめ、日本ではどこでも、犯罪に巻き込まれる可能性が、他国の都市に比べて格段に低いのではないのでしょうか。この治安のよさはとても大きいと思います。一方で、「公

園やスポーツ、文化イベントなどの施設が整っている」や「外国人に対する行政サービスがわかりやすい」といった理由で住みやすさを感じている割合は低いようです。

エコノミスト誌がまとめたイギリスの住みやすい街ランキング（医療、教育、安定性、文化と環境、社会基盤といった基準で順位付け）の1位はマンチェスターです。



イギリスでは1位のマンチェスターですが、世界では46位という結果になっています。



世界トップ5の都市をみると、オーストラリアとカナダからそれぞれ2都市ずつ選出されています。この住みやすさ上位の街の共通点としては、中規模の都市、人口密度が高すぎない、犯罪が少ないといった点が挙げられます。

住みやすさの視点で熊本をみたとき、街の中心部にビジネスの環境と住環境が共存している点がよいところであると感じます。今後もこの環境が保たれるよう舵取りしていく必要があるでしょう。

その他、外国人が暮らしやすいと感じる大きな要因の一つである言語サービスを見てみましょう。



ストラスブルグはフランス語とドイツ語、英語のウェブサイトを持っています。一方メルボルン、トロント、バンクーバーやロンドンは英語のサイトだけです。これに比べると、英語、韓国語、中国語の3ヶ国語に対応している熊本市のホームページは充実していると言えるのではないのでしょうか。但し、熊本市のホームページでは、観光以外の外国語情報が少し少ないのではないかと感じます。

ここで一つ提案です！



緊急通報の電話番号を世界共通にすると皆分かりやすく、安心なのではないでしょうか？イギリスでは999番で警察、消防、救急すべてに対応しています。このように、1つの番号で全ての緊急通報に対応し、さらに全世界共通であればどこへいても安心感がありますね。

最後に、今日はイギリスのいくつかの街の風景をお見せしましたが、イギリスのほとんどの街は、その町それぞれの雰囲気があります。日本では、どこもおなじような風景というのが多すぎるように思います。街の全体的な景観や歴史性をもう少し大切にしたい視点が必要なのかなと感じています。

ご清聴ありがとうございました。